

紹介

岡村秀典著

『夏王朝 王権誕生の考古学』

俗に「中国四千年の歴史」という。本書は、そのはじまりの部分、おおむね紀元前二千年紀前半代とされる、伝説上の中国最初の王朝「夏」にまつわる考古学と文献史学の成果を軸に据え、中国における国家形成を論じた書物である。テーマは堅いが、専門外の読者にも理解できるよう平易な文章で著された普及書といえる。

甲骨文と考古資料の双方で裏付けられている殷（商）王朝に対して、先行する夏王朝の探索は、現代の中国にあつては、国のルーツをさぐる国家的な重点課題として取り組まれており、近年飛躍的に成果が蓄積されてきている。しかしながら、日本も含めた中国外の研究者は、王朝問題に慎重で積極的発言を回避している。その実状をふまえて岡村氏は、新石器時代から青銅器時代へ、農耕社会から都市の成立へとといった、

人類史に共通の普遍性をもった課題として、事象の評価や背景を広い視野から研究できるのではないかと、と説く（「プロローグ 中国のルーツを求めて」）。

以下、その実践を果たす本書前半は、文献史からみた夏王朝問題の検証で、おもに古典籍にみられる夏王朝の伝承を、それが記された戦国時代から漢代という時代背景をふまえて整理する（第一章 伝説の時代）。「第二章 夏王朝は実在したか―伝説と史実のはざま」。結果、千年以上を経て記載されたこれら古典籍が決定的な資料足り得ないという、順当な結論が下されるわけであるが、この種の考証の難解な専門書や原典を容易に読みこなせない門外漢にとっては、非常にありがたい部分である。

後半が、考古学からみた夏王朝という本題に入り、まず中国考古学誕生以来の探索史が概観される（第三章 考古学からの探索）。その後、夏の王都と目される河南省二里頭遺跡の宮殿遺構をはじめとした発掘調査成果、同遺跡を指標とする二里頭文化の時期の環境・生業・生活の側面が紹介される（第四章 王権の誕生）。「第五章 二里頭文化の生活」。具体的には、王権と

それを支えた儀礼という観点で、建物や付属施設などの遺構、玉器・土器・青銅器などの出土遺物が綿密に検証されている。そして、花粉分析や動・植物の遺存体分析の成果を積極的に活用して、二里頭文化から二里岡文化にかけて、すなわち夏王朝期からその後の殷（商）王朝期にかけての環境や生業の変化を復元し、さらには、食器の器形や組み合わせの変遷から食生活に生じた変化にも言及する。王権の成立が、社会のどのレベルまで影響を及ぼし、いかなるプロセスで進行していったのかを明らかにするには、王のありようとともに庶民の日常生活を含めた総合的検討が欠かせない。

岡村氏自身も述べるように、上記二章の部分が本書の中核であるとともに、事項羅列的な類書と異なる最もオリジナルで新鮮な部分といえよう。

最後に、二里頭文化の空間的広がりや地域間交流の問題が取り上げられ、二里頭を中心とする放射形のネットワークが想定されたのち（第六章 中国的世界の形成）、四期に区分された二里頭文化のうちの三期に王朝が成立したことが確言される（終章 実在した夏王朝）。すなわち夏王朝で

ある。指標となった二里頭遺跡は夏王朝最

後の都、その六キロ東方の偃師城遺跡は、発掘成果と古典籍の考証から、それを攻略した殷湯王の都である、というのが中国での通説であるという。もともと、確からしいのはそれだけで、夏王朝のほとんどの部分は伝説の世界の中にとどまっており、未解決の課題も山積していることがわかる。

意外なことに、二里頭文化の領域は、王都の二里頭を中心とする半径一〇〇キロほどにすぎず、夏王朝は勢力拡大に積極的でなかったらしい。広大な中国大陸からみていかにも狭小と感ずるのだが、それでも王朝たるべき条件を備えていたわけである。それは何か?。「礼制」である。有力者の権益維持装置としての宮廷儀礼すなわち礼制の整備をもって、王朝成立とみるのである。

それは、考古学的には礼器としての玉器の体系や飲酒儀礼に用いる銅酒器、儀礼空間たる宮殿遺構などとして確認される。二十世紀の清朝末まで、歴代王朝に連続と継承されたもののはじまりが二里頭三期にあり、四千年の中国文明を特徴づけるものこそ礼制であるという。中国の国家形成に關して、このような礼制をキーワードと

した岡村氏の整理はすこぶる明快である。中国考古学の該博な知識とあわせて、古典籍の内容にも精通した氏ならではの成果といえよう。

なお本書は、考古資料のとりあつかいも示唆的な視点が多く、対象地域を越えて大いに刺激される。例えば、いささか複雑だが、二里頭文化・二里岡文化というのは土器にもとづく区分であって、夏・殷（商）という王朝の交代と一致しない。高度に政治的な事象と、庶民の日常生活を反映する土器の変化とが、レベルが異なっていることの反映なのだが、やがて前者が後者にも影響を及ぼして変化させていく過程を、本書は非常に具体的に示している。土器研究に熱心な日本考古学の研究者達にとって、参照に値する事例だろう。また、国家のルーツという点でいえば、邪馬台国論争が想起される。発掘成果が新聞紙上を飾ることも多いのだが、果たしてわたしたちはそれらを人類史の普遍的課題の研究資料としても活用できているのだろうか。いささか不安である。その解決のヒントを本書に探すというのも、有効な活用法と思われる。

(A5判 二五〇頁 二〇〇三年二月)

講談社 税別一九〇〇円)

(伊藤淳史 京都大学埋蔵文化財研究センター助手)